

土とふるさとの文学全集

9



土とふるさとの文学全集

9

歴史の視野

歴史の視野

昭和五十一年四月二十日 発行

編集人

白井吉見
小田切秀雄
瀬沼茂樹
水上勉
和田傳

発行者

高橋芳郎

東京都新宿区市谷船河原町十一(〒162)

発行所

社団法人 家の光協会 ©

電話 (260) 三一五一(大代表)

振替 東京 514724

印刷 三松堂印刷株式会社
製本 寿製本株式会社

歴史の視野

土とふるさとの文学全集

9

再び草の野に	田山花袋	5
義民甚兵衛	菊池 寛	86
本郷村善九郎	江馬 修	91
コシヤマイン記	鶴田知也	219
土の中からの話	坂口安吾	238
沖縄島	霜多正次	246
秩父困民党	西野辰吉	409
辛酸	城山三郎	543

解説

杉浦明平

591

年譜

607

装丁

伊藤 憲治

編集協力

南雲 道雄

葦山 圭介

赤星虎次郎

再び草の野に

田山花袋

その一

一

妻の畠や水田や村落やまたは、その間を縫っている塵埃の白くあがる路などで蔽われていなかった以前は、野はもつと荒涼としたものであった。草藪が草藪に続き、林が林に続き、水はただ低きにつれて自由に流れ、鳥は静かに春の花の埋れた中に鳴き交わし、獣は野分のあととの乱れた草を踏み分けて走った。たまたまその広い野の中をこつちから向うに横ぎった長い路があつたにしても、それは深い萱や薄で蔽われて、通つて行く旅客もまれに、午後の日影はいたずらにさびしく樹間から線を作成してさし込んで来るばかりであつた。春になると、雲雀は高い声でその純な恋を名告るようにして空に囀り揚つた。

恐らく今のように、野から路へ、路から土手へ、土手から広く溶々と流れた川へと下つて、周囲を遠く環のように繞つた山々の白い雪を眺めて、「雪よ、雪よ、山の雪よ」

と叫ぶものなどもなかつたであらう。山はただ冬が来たために白く輝き、野はただ春の来たために麗かに霞んだのであらう。草藪や林は西風の吹くためにざわつき、雪消の水の押し流して来るために、あたりは洪水に浸されたであらう。そしてそれをふせぐものもなしに、水はただ思うままに氾濫したであらう。従つてその水脈は幾筋にもわかれて、昔のIの渡頭のあるあたりも、時によつてはいろいろに變つて行つたさまで、それとうなずかれて考えられた。今でも好奇の旅客はその昔の渡頭の址をそこかここかとたずね侘びて、或は村落と村落との間に、或は小さな残つた流のデルタに、或は古い社の残つている一帯の低地に、てんでにその新しい発見を誇つた。昔の野の址をたずねようとするには、今は古い寺、祠、墓、そうしたもののほかに、もはや何も残つていなかった。

村落や町の中におりおり残つている古い寺、またはその古い寺の中に残つている墓や記録、それは二三年前まで溯つて行つていたが、しかもそれはなおはっきりと昔の野のあとを想像させるには物足らなかつた。それよりも、蘆荻の一茎が、または湛え残された錆びた沼の水が、そこに冬の来るたびにやつて来る渡り鳥が、この野を行くものに昔の野のさまをあざやかに眼の前に描いて見せた。

二

林から野に出ようとするとところに、ある時、渡り鳥を獲るための網が張られた。

かれ等はその近くにある村落からやって来た。一人は竿を担い、一人は網を抱えながらやって来た。

それは初冬のやや寒い夕暮で、そこに網を張って置いて、朝早くその獲物を獲ようとしているのであった。西風がうすら寒く野の杜を鳴して、ガサゴソする丘のほとりの薄や萱に夕日が薄く微かに残っていた。

「どうだ、来そうだな」

「きつと来る……この風に空の工合ではきつと来る」

こんなことを言いながら、くつきりと晴れて暮色に染った空をかれ等は仰ぎ見るようにした。西風の立った工合といい、夕暮の寒い空気といい、薄や萱のガサゴソするさまといい、一つとしてかれ等を満足させないものは無かった。かれ等は明朝の獲物の数を頭に浮べた。

かれ等はまず網と竿とをそこに投げ出して、その傍にしゃがんで、腰から煙草入を出して、石をすって、ホクチに火をつけて、そしてスパスパとうまそうに煙草を一服二服吸った。

「今年は来ようがいくら遅れた」

「でも、昨夜なんかずいぶん来たぜ……家の周囲の樺に来たにも来たにも……。黙って寝て聞いていられねえくらいに来た」

「今が丁度好いんだ。今夜はきつと来るに違ひねえ」

こう言いながら、かれ等は立って、まず竿を立てた。

それは三間位にわたる長さの竿で、それを両方に立てて、そして今度は持つて来た網をひろげた。それは細い黒い糸でつくられた大きな網だ。

一時間位かれ等はそこにいたであろうか。すっかりその準備の出来上った頃には、日はもう残りなく暮れて、オレンジ色の夕照も次第に薄

く、遠くに光って見えている細い川の流れももう次第に暗く見えなくなつてしまっていた。

かれ等はまた話した。

「寒くなつたな……」

「本当だ……これから、雪になるのはもうじきだ」

「寒に入ったら、また日振でもやるかな」

「あれも好いが、寒くつてな」

「そんなことを言っていちゃ、お大名だ。今年も獲物がありそうだな」

「てめいは行くか？」

「行く」

で、やがてかれ等は静かに満足して家の方へと向つた。かれ等は今夜は眠られぬであろう。渡り鳥の無数にやって来る羽の音、ざわざわと騒ぐ氣勢、葉と共に枝から枝へ集り落ちる音、それを聞いただけでも、自分達の網に鳥の集るさまが想像されて、臆を合わせる事が出来ないであろう。日はいつかとつぶり暮れてしまった。路傍の庚申の石も、藁によも、丘の畔の薄も何もかも全く夜の暗黒の中に包まれてしまった。

昼でさえそれとはつきりは見えない細い黒い糸の網は、こうして、夜を、静かな夜を、その丘のほとりに張られて残された。そうした危い陥穽のあるとは夢にも知らずに遠くからやって来る渡り鳥は……。

三

「世話はするで、どうかいて下され。誰が死んでも、仏のために、お経の一つも読んで貰う方丈さんがいねえでな、この村には——」

こう言つて引留められたのは、六十二三の老いた僧で、一生を旅から

旅へと鈴を鳴らし、数珠を手まさぐってやって来たような人であった。五六日前、かれは川を渡ってそこに旅にやつれた姿を見た。

それを村——村と言ってもまだ十二三軒しかない聚落の一軒の主人が、丁度その母親の初七日の供養に当るといので、それを無理に頼んで、草鞋をぬがせて、そして家に上げて誂經をして貰った。ところが、それをききつたえて、そこからもかしこからもかれを頼みに来た。最初に野と戦い、西風と戦い、洪水と戦ったような新しい開墾地では、医師も必要だが、それ以上に死を吊って貰う僧が必要であった。一月以上も留められていた後、かれはそこに、永住するようにと幾重にも村の人達から頼まれた。

僧は川の畔に遠くない小さな掘立小屋のような寺に置かれた。

そこには村の人達はいろいろなものを持って来た。米を背負って来るものもあれば、味噌を持って来るものもある。薪を拾って来るものもある。本尊がなくてはと言つて、村の頭立ったものは、どこからか弥勒仏の小さい金仏を持って来て、それを屋の中央に壇をつくつて据えた。

そこからは、朝に、夕に、絶えない誂經の音がきこえて来た。

それは大抵法華經の普門品の一節であった。

村の人達はその誂經の声に促されたようにして、またそれに力づけられたようにして、辛い艱難な労働を続けた。生れたものは働いてそして死んで行かなければならなかった。月はさびしくかれ等の上を照し、星はきらきらと天上の栄えを語った。

村は大きくなって次第に富み栄えた。立派な寺の本堂もその旅僧の数の後には出来た。山門に達する路には、大きな古い杉の並木が繁り、舗道は出来、墓場には村の人達と共に、その旅の僧を始めとして、歴代

の僧の丸い墓が立てられた。名もない草花は咲いて散り、小鳥は好い声を立てて囀り交わした。

旅僧の来た以前からあったものか、それともその後の川の洪水のために出来たものか、それは記録がないので、どっちだかわからなかったが、その寺から少し離れて、蘆荻の深く繁った錆びた小さな沼がおりおり夕日にかがやいて見えた。今はもうあたりはすっかり開けた。路も縦横に村から村、町から町へと通じた。乗合馬車がラッパを鳴らして通つて行つた。自転車なども滑かにその街道を軋らせて行つた。

「何でも、その沼の出来たのは、そんなに古いことではないということです。さア、寺とどっちが先ですか？ 多分寺の方があとだろうと思うが、百五十年はまだ経っていませんまい」

こう村の人達は言うけれども、その沼はもともと昔の、原始時代からでもあったかのように、錆色にどんよりと湛えて、藻も底深く気味わるく繁り、いつもさびしい空が何かの眼でもあるように幽鬱に映つて眺められた。そこでは鯉だの鰻だのが獲れた。

しかし夏はいろいろな水草が繁つて、水あおいや沢瀉や河骨などの花も咲き赤い白い蓮の花も咲いた。

そして冬になると、渡り鳥は今でもやって来て、もう網で獲ることなどは出来なくなつてはいたけれど、それでも鴨、雁、しぎなどが盛んに下りるので、都から来る遊獵者の銃の音はおりおり静かなあたりに響きわたつてきかれた。

日町から大きなT川をわたつて、国を異にしたT町へと通ずる塵埃の多い白い街道は、この錆びた沼の右の岸を通して、それから大きな治水工事の施してある堤防の上へとかかつて行くのであるが、この道路と沼

との間に、一ところかなり広い地域を、水田にもせず、畠にもせず、唯、草藪にして残してあるところがあって、そこには春はれんげや蕘が一面に見事に咲き、雲雀が好い声を立てて空に揚った。

T川の大きな流を見てやって来た人達は、大抵はそこに来て、すぐのその前の堤防の長く連っているのを目にして、その草藪の中に細く通じ路のあるのを選んで、そこを突切つて、一散に高い土手へ上つて行くのを例にした。土手の上からは、今だにあたりが荒涼とした町であった時分を思わせるようなさびしい大きなT川が洋々として流れていた。帆の影さえそこには滅多には上つて来なかつた。

しかし何という広々としたさびしさであらう。また何と言う荒涼とした眺めを持っている川であらう。ところどころに砂洲をつくつて水は静かに流れているが、村落の所在を標示した森が散点されてあるばかりで、岸には何ら川を彩る色彩もなかつた。

悠々として流れてとどまらず——そこに来ては誰でもそうした感じにうたれずにいるものは恐らくはあるまい。

急に上流で、物の轟くような音響が川に響きわたつてきこえた。

「ヤ、舟橋だ。舟橋があるんだ」

こう誰も彼も思わず声を挙げて言った。その舟橋の上を、さっきの街道が、錆びた沼に添つた街道が、車やら荷馬車やら乗合馬車やらを載せて、そしてT町へと通つて行つていたのであつた。

静かに土手を下ると、そこに桑畑がある。また草藪がある。年々の出水に捨て去られたデルタがある。そしてその間に通じた折れ曲つた草路が、やがてかれ等をRの渡頭へと伴つて行つた。

四

その錆びた沼の岸にある古い農家の一間を借りて、ある年、都会から一人の若い文学者がハイカラな美しい細君を伴れて来て暮した。

その文学者の蒼白い、瘦せた姿をしているのに比して、その細君は色白く肥つて、髪を女優鬘に結つたりして田舎の人達を驚かした。いろいろな噂は時の間にあたりに伝えられた。二人が出来合いの自由恋愛者であるということ、女は一二度は舞台で役者の真似をした人であるということ、男はまだそう大してすぐれた作家ではないが、一二世に公にした作品が多少文壇の視聽を聳たしめたということ、夜は遅くまで起きている代りに朝は十時頃でなければ起きないということ、始終夫婦喧嘩が絶えないということ、始めの中はそれを本當にして心配して仲裁してやつたが、段々それは喧嘩の後のいちやつきの色を濃厚にするためだとわかつて、今では誰も喧嘩をしても相手にしないということ、ああいう夫婦もめずらしいということ、朝など行つて見ると、一枚の蒲団に一枚の寝巻をかけて寝ていて、そのだらしのなざと言つたらこちらで却つて気の毒になる位であるということ、そうしたことがそれからそれへ語り伝えられた。それに、どうかすると、二人で一緒に、これもやはり東京からつれて来た大きな犬をつれて、手を引き合うようにしてそこそこ散歩しているさまが近所の人々の眼を聳たしめた。「どうだんべ、また、つるんで歩いていける」田草を採りに出た上さん達がこう言つて手を留めて見ているものもあれば、「犬べい、見せつけられて、始けて、しようがなかんべ。だから、あの犬は始終はッ言つて赤い舌を出して匂いをかいて歩いているじゃねえか」などと面白そうに笑つて話す男などもあ

った。それにまたその大きな犬は、かれらに取って、こうした他郷の、田舎の迫害から来るあらゆるものに対する有力な防衛の道具のように見えた。その犬はよく吠えた。学校帰りの子供達は、その犬に逢うと、震えて足がすくんで、すれ違つて通ることが出来なかつた。田舎にはそうした烈しい犬はどこにも見出されなかつた。

文学者に取っては、しかし、この幽棲は、その生活上またその思想上、決定的のものであつた。どうかして今までの生活から浮び上がらなければならぬ。お互いに新しい心の革命をしなければならぬ。更にすぐれた新しい努力を創作の上に試みなければならぬ。こう思つてかれはそこにやつて来た。一時、あらゆる烈しい都会の刺戟から離れて、新規時直しをやるつもりでやつて来た。次に、また以前から女に絡みつき纏りついでいたより他の男性の Love Affair から女を切離して、完全に自分のものにするには、どうしても一時こうした生活をしなければならぬと思つてやつて来た。従つてその夫婦喧嘩はいつもそうした昔の幽霊から起つた。

ある夜はひどく喧嘩して、女が家から飛び出したのを追つて、三里もある停車場近くまで行つて、伴れて戻つて来たこともあれば、もう遁げたものと思つて、失望落胆して、思い崩折れているところに、ひょくり思い返して女が帰つて来たことなどもあつた。その時は一夜中感謝のエクスタシーに陥つたようにして男は女を可愛がった。女はもうその文学者からは離れることが出来ないような情愛に伴れられて行つてゐた。

かれ等のいる一間からは、その錆びた沼の一部がそれとのぞかれるように、または蘆や萩や藺に半ば埋却されてしまつてゐるように見える。さびしい空が雲と一緒にさびしくそこに映つてゐる時もあるれば、夕日が

わる赤く血のように沼を染めてゐる時もあった。春の末頃から来てその年の冬に及んだかれ等の生活には、さびしいわびしい梅雨が鬱陶しく降り、一步も外出することの出来ないような泥濘がかれ等の心を埋め、やがてそれがすむと、暑い暑い平野の夏の夕暮などは蚊帳のなかでなければ食事を取ることも出来ない蚊群の襲撃がかれ等を脅かした。かれ等は何遍そこを一刻も早く切り上げて都会に帰りたいと思つたか知れなかつた。否、もし他にかれ等を慰める沼のラスチックな眺めと、T川の涼しい夜風と、美しいお伽話の中の姫を思わせるような水あおいや河骨や旨い廉い鰻や川鰻や、そうしたものがなかつたならば、とてもそう長くはそこに落着いてゐることは出来なかつたに相違なかつた。

かれにはかれ等の恋愛生活をこうした沼の畔に置いて見るのがロマンチックな感じを起させた。錆び果てたとも言えれば、爛れ尽したとも言える二人の恋愛状態は、いかにこの錆びた沼と幽鬱な田舎とに伴つてゐたであろうか。そしてその汚なくけがれた中に、あの美しい水あおいの花を咲かせたさまに似ていたのであろうか。女はいつもその紫の花を折つて来ては、男のせつせと筆を走らせてゐる傍に生けて置いた。

「この花を見ると、勇氣が起る」

こうかれは女に言つた。

水鶏の声も割葦の声もかれを力づけた。あの盛んな割葦の饒舌と、その熱烈な恋ごころと、水鶏のあの静かな雄を呼ぶ鳴声とはともにかれ等に一種絵に似た恋の「詩」を夢みさせた。

かれはまたよく散歩に出かけた。かれは夕日に染えた沼のほとりから、森の中に見えるその旅の僧の開基した寺の山門へと向つて歩を運んだ。そして山門のところに行くと、いつもかれは振返つて、沼と蘆荻と

その向うにある自分の家を見た。

かれはしかし旅の僧の伝説などは知らなかった。誰もかれにその話をしときかせるものもなかった。またこの附近が昔一面の荒野であったことをもかれは考えなかった。かれはただ歩いて寺の中に行つた。

大きな銀杏の樹や、美しく赤く咲いている百日紅がかれをそこに引寄せた。寺は寂としていた。いつ行つて見ても、読経の声もきこえて来なかつた。

「ジャック、ジャック」

こう呼ぶと、その犬は急いで飛んで主人の傍にやつて来た。

寺から土手に上つて行くその草地を、ある夜かれは女と犬とを伴れて歩いた。かれ等は夕暮の丁川を見に行つて、余り長く河岸でさまよつて、そして帰りは遅く暗くなつてしまつたのであつた。その草路に土手から下りようとするところで、かれは急に女に対する強い愛を感じた。いきなりかれは女に寄添つて手を握つた。女の手も心も熱かつた。かれ等は家をも臥床をも何もかも持つてゐる仲ではあるけれども、また家中ではいかようなことをしようとも差支えない仲であつたけれども、しかも今は家も臥床も持たない恋人同士のようにして、唇を合わせたり、女の髪の臭いを嗅いだりしなければならなかつた。女は少しの間それを拒絶したけれども、しかも青草の臭と暗夜とがかれ等の周囲にあつた。かれらは暫しそこに留つた。

暫くして、

「ジャック、ジャック」

こう呼ぶ主人の声がした。それまで恋の番人をしていた犬は、闇の中から二人に飛つくようにした。

二人は静かに街道から沼の畔の方へと出て来た。灯がところどころにチラチラ点綴されて見えた。

「沼のかおりというものがあるね。一種不思議なロマンチックなものだね」こんなことをかれは言つた。

しかしかれ等の沼の畔における生活は決して楽な生活ではなかつた。約束した社から金が来ないために、または原稿が売れなかつたがために、一月を全く財布に金なしに暮してしまわなければならないような時もあった。かれ等に室を貸している農夫は、さすがに都会でのように直接にはその間代を請求しなかつたけれども、しかもそれよりも一層わるい侮蔑と圧迫とをかれ等に与えた。時には鼻涙もひっかけないような態度さえ見せた。段々かれ等は田舎の人達の汚なく腹黒く卑しい心の生活を知るようになった。

「都会における孤独は、孤独そのままであることが出来るけれど、田舎での孤独は、じつとして孤独でいることも出来ない」

こうした言葉をかれはその感想の中に書きつけた。

やがて秋が来た。洪水の憂いのひんびんとして伝わる凄しい風雨が来た。空は暗く低く錆びた沼を蔽つた。雨の一時やんだ時に、土手の方に行つて見たかれは、川が凄じい濁流を漲らして、平生のあの静けさは、さびしさはどこに行つたかと思われるばかりに原始の状態に戻らうとして怒号奔漲しているのを見た。いつもの桑畑やデルタはすっかり水に浸つて、土手のすぐ下の草まで濁流に押し流されそうにしていた。

しかしその凄じい洪水を予想させた風雨も大したこともなくて過ぎた。つづいて晴れやかな、月のあかるい、垣根に、轡虫や馬追のすだく、木樅のところどころに紅く白い秋が来た。天末にさびしい色ある雲の靡

きわたる時が来た。葉末の枯れた蓮の葉、菱の葉、萱の葉、蘆荻の葉、その上にさびしい秋の風が吹き渡った。

かれがここに来てから書き始めた長い小説は、一度は百枚ほど書いて破って棄て、一度はどうしても纏らないために、一月ほども手を束ねてぶらぶらしていたが、この頃になってようやく興が乗って、段々思い通りに書けるようになった。今はかれの恋愛にのみ没頭していられなくなった。また田園の迫害を相手にしてはいられなくなった。かれはとにかくそれを書き終えて、そして一刻も早くこの幽鬱な生活から免れたいと思ひながら終日長く沼に面して坐って筆を執った。若い細君もその傍に黙って坐って、そしてやはり一刻も早くその稿の出来上って都会に帰って行く日の近づいて来るのを待った。夫が散歩に出かけて行ったあとでは、若い細君はよくそこで出来た原稿の紙数を数えた。

しかしこの頃の田舎の静かなサインは、かれ等に何とも言われない快さと楽しさとを与えた。かれは勞れては、よく沼に舟を漕いで行ったり、土手の下の草路のあたりを歩いたり、寺の奥の歴代の僧の墓の前にその姿をあらわしたりした。淡竹の藪を洩れてきこえて来る青縞を織る機はたの音を静かな心で聞いた。「詩」がいつもかれの頭を流れた。

初冬の寒く晴れた日、これから四周を繞る山の雪が美しくなるうとする日、その沼の畔の家の前には、三台の俵がさびしく置かれてあるのが小さく街道のほとりから見えた。西風はもう立ち始めた。沼の蘆荻はガサソと鳴った。渡り鳥の羽音は絶えず林から沼に向って下りて行った。沼には晴れた空が皺を疊んださざ波の上にさびしく映っているのが眺められた。

一台の俵には、かれ等の身のまわりのものが積まれた。古びて色褪あせ

た大きな信玄袋、荒縄でからげられた柳行李の縁は破れて、中から外国の小説本が一二冊はみ出していた。汚れた寝道具は大きな浅黄色の風呂敷に包まれて、その上に積まれた。

期待して来たように、新しい心の革命もすることが出来ず、女の心も完全にかむことも出来ず、思ったほど感興の充実した小説も作ることも出来ずに、やはり渡り鳥の南から北へ帰って行くように、時が来て、かれ等も再び都会へと出て行くのであった。たまつた間代は、帰ってから送つてよこすことにしてこらえて貰った。酒屋、米屋の勘定も待つて貰った。侮蔑と罵倒とをあとに残してかれらはそこから別れて行った。

普通ならば、ここに世話してくれた文学好きの青年位は、三里先きの停車場まで見送つてくれてもいいのであるが、それすら今は姿すらもそこに見せなかつた。

かれ等はただ、家の人達に挨拶して、そして俵に乗った。

「左様なら」

「左様なら」

それは家の人達に別れを告げる言葉ではなくて、沼や、草路や、蘆荻や、土手や、T川に別れて行く言葉のような気がした。一番先に若い細君の色の白い顔、次にかれの髪の毛の長いやつれた姿、それにつづいて荷物を載せた俵が三台並んで静かに街道の上を動いて行った。犬はそのあとから路草を食ひながら走ったり留ったりして行った。

晴れた碧い空には純白な雲が静かに流れた。

かれ等の立つて行った翌日は、冷めたい初冬の雨が降って、土手の下の草路からは、沼の蘆荻の白い花が半は水に埋もれ伏したように見え

その二

一

その草路と土手との間に、一筋の折れ曲った小さな流が囁くように流れて、秋はそこに野菊やらみ萩やら水引草やらがその影をひたした。が、その流れの上の丘の一部を開いて、この頃、下等な煉瓦を焼く大きな竈が二つまで出来た。

職工が五六人集って、せつせとその竈の火を燃した。

低い二本の煙突からは、時には漲るように、また時には薄く靡くように真直にまた横折れて黄い黒い煙が上がった。

小さな流には、板橋がかけられて、そこをかれ等の寝たり起きたりする低い掘立小屋から、職工達は、土を畚に入れたり何かして渡つて来た。材料の土を運ぶトロッコはまだ一条も出来ていないので、かれ等は遠くからそれを運んで来なければならなかった。

その掘立小屋の中には、夜は小さなランプがぼつとりと一つついて、その下に燻っている囲炉裏の火のおりおり燃えあがるのが赤く闇を飾って見えた。そこではあらゆるれた男が、三人も四人も集って、廉い地酒に酔って管を巻いたり、いろいろな儲け話をしたり、でなければ近所の女との色話をしたりして、後にはそれにも倦み勞れて、そして板のような薄い蒲団にくるまって寝た。朝は霜が雪のように白かった。

「えらく寒くなったじゃねえか」

こんなことを言って、かれ等は井戸に行つて顔を洗つて、また囲炉裏の傍に戻つて来て、ぐつぐつ煮ている大きな鍋の蓋を取つて見た。

「肴でも買つて来うや……。このうのべつに大根べい食つていちゃ、働けねえでな」

「本当だ……」

「町まで行つて来うや」一番若いのにこう声をかけて、「町まで行きや、

もう豚位あんべいや」

「行つて来べいよ」

「酒と、食う物位ふんだんになくっちゃ、働けねえや。……勝はどうした？ 昨夜も帰つて来ねえか。若い奴はのんきだな。着物もなくつて震えている癖に、あまにかげちゃ、食うものも食わねえでも好いだからな」

こんなことを言つて、政というかれ等の群では一番幅の利く四十先の

大きな男は、囲炉裏の前に大胡坐をかいて坐つた。

「今日は旦那来べいな。来て勘定してくんねえじゃ困る」

「今日は何にしても来べいよ」

他の一人が合せた。

「竈の方は定が行つたんか」

「行つた」

「どうもうまく行かねえな……材料がわりいでな」

この界限では、これ以前にも、廉い下等な瓦を焼いたり、陶器を焼いたりするところがそここにあつた。材料はどつちかと言えれば好い方でない上に、竈も焼き方も完全でないで、とても思つたようなものは出来なかつたけれども、それでも廉くつて軽便なので、地方的に需要が多く、K町の瓦と言えは、かなり世間にきこえているのであつた。勿

論、ここにこの煉瓦の竈を起したのはこの村のものではなかったが、川向うのS村では昔からきこえた金持で、今でこそ家運が衰退したと言われているけれども、それでもS村のKと言え、誰でも知らないものはない位の古い家であった。何でも噂では、先年妻^{あなご}狂いや何かをして、散家財を蕩^{たふし}尽して、その挙句に先代が死んで行つてから、その息子のKは、家道の回復に腐心して、どうかしてもう一度、元の財産家になりたいた言うので、それで、いろいろな事業に手を出し始めたというこゝろであった。

ここに、竈を起すことについての動機は、いろいろあったけれど、その中で一番大きな動機は、東京の浅草を出発点にして、^{下野}の機業地に達する汽車が、必ずここを通過して行くに相違ないということとをKがどこかで嗅ぎつけたためであった。K町附近に生い立っただけにKは瓦を焼くことに熟していた。またその製造の利益の多いのにも熟していた。かれはここに停車場が出来れば、いかようにも広くかつ軽便にその製造品を運ぶことが出来ると思った。否、そればかりではなかった。そうした事業が汽車の出来たために、大きな成功をして巨万の富を重ねたもののあることなどもかれは知っていた。それに、瓦よりも煉瓦の方が、たとえ品質は完全でないにしても、これからの社会には需要の多いことを知っているかれは、いろいろ研究の結果、自分にはそう大して深い経験がないにも拘らずここに小さな竈をひらいて見る気になったのであった。それに、材料にする土もいくらかはその附近にあるし、燃料もあたり豊富であった。かれはいつも巨万の富を夢^{あま}んでいた。

かれはおりおりそこに姿を見せた。肥った四十近い立派な男で、金ぐさりをへこ帯に巻き附けたり、パナマの新しい帽子をかぶつたりして、

よく竈のあたりにその姿を見せて、製品の結果を験^しべたり、職工を相手にして販売の方法を話したりした。

製品の結果は、そう好くはなかったけれども、もう少し研究もし、方法を講じたならば、これでどうやらこうやらおつ^つついて行きそうに見えた。掘立小屋の中に入つて行つては、

「今に、立派な家を立てて入れてやるよ。汽車さへ早く来りや、こゝろ一面に大きな工場にして見せるがな」

こう言つて職工を相手に、そのまづい地酒をその囲炉裏のところで飲んだ。

そして来る度に、細かく崩して来た銀貨や白銅のチャラチャラ入っている財布から五日分の賃銀を出して、そしてそれを職工に渡した。

その日もかれは午後からやつて来て、竈の中を覗いたり、そこに積まれている製造品を見たり、また丘の上にその姿をくつきりと見せて、荒野の中に烟を漲らして活動している自分の事業のことを考えたり、夕日にかがやく沼の方を眺めたりしていたが、やがて夕暮近くなつてから、いつもの賃銀を職人達にわたして、そして待たせて置いた俵^{はら}で東京の方へと行つた。

ある日は、煉瓦を見に来た鬚の生えた洋服の男とKと立って話しているのを職人達は見た。

「どうも、もつと色が出そうなんだがな。……これじゃ、どうもしやうがない。質も余り緻密^{ちみつ}ではない」

こんなことをその見に来た男は言つた。

近所でもこの事業についての種々な噂^{いさや}がきかれた。ある人は、「とても駄目なこんだ。御本人が元々そうした知識がないんだから」と言つ

て、てんで相手にしなかった。ある人はそれをK停車場附近で焼かれる煉瓦に比べて批評した。「もう少し資本を入れなければ駄目だ。技師の一人や二人は置くような設備をしなけりや……。そりや、汽車が出来れば、満更捨てた事業でもないよ。発展の見込がないじゃないが、しかし、それによもう少しどうかしなけりや……。」と言った。

しかし、価が安いので、地方的にはそれ相応に需要があるらしく、時には荷馬車が轍を深くその草路に印しながら、そこに積んである煉瓦を運んで行っているのが街道を行く人々の眼に留った。

竈から巻き上る烟は、常に西風に横折れて靡いた。

沼の畔の家をその文学者が去ってから、一二年は既に経過していた。

二

勝は午過になっても帰って来なかった。

「あきれた阿呆鳥だな」

「文なしで帰れねえだんべいや」

「可愛がられていやがるんだよ。あいつ、持てるって言うから」

こんなことを言って、噂をしていたが、待っても待ってもやって来ず、四時すぎになってもその姿を見せないの、

「どうしやがったな」

「仕事が辛いで、突走ってしまったかな」

「そんなことはあんめいと思うんだがな。突走るにしても、文なしじや、どうにもなんめいやな」

「今に、のっそり帰って来るよ。あまり遅くなくなってしまったで、かえりそびれてしまったんだんべい」

しかしかれ等は探して見るといふ気にもならなかった。やがて夜が来た。暗い寒い夜が来た。昼間から吹き出した西風が一層つよくなって、吹さらしの野は、家から顔すらも出すことが出来なかった。風は低い掘立小屋の板屋根に吼え、竈の煙突に咽び、更に遠く寺の櫓の古樹に潮のような音を漲らせた。

政は小便を外に出た。

寺の灯がぼつり暗に一つ見えるばかりで、あとは風ばかりが荒れた。

「お寒……寒……小便も碌にしていられやしねえ」

こう言って政は入って来た。好い加減にかれは酔っていた。

「どうしやがったんべな、本当に……。心配させる奴だな」

こう政は思い出したように言った。

勝は政が引張って伴れて来たのであった。野州あたりの生れで、のっそりとしていて家には親も兄弟もあるが、どうしても家に帰るのはいやだと言って、この前、政の為事をしていた工場に来ていた。それを不便に思っ、政はいろいろに眼をかけてやった。自分の着物などもやった。こっちに来るについても、政は自分でいたわって使つてやるつもりでつれて来た。

翌日になっても、勝はやつぱりその姿を見せなかった。

「突走りやがったな、いよいよ……」

こう言いながら、心配になるので、いつも町に酒や食料を買いに行く男に、次手に勝のよく行くだるまやに寄つて様子をきいて来るように頼んだ。

男はやがて帰つて来た。